

Our Words, Our Worlds: Writing on Black South African Women Poets, 2000-2018

Makhosazana Xaba, ed.

Pietermaritzburg: University of KwaZulu-Natal Press 2019 xii+315 p.

本書は、総勢 24 名の執筆者の論考やインタビューによって、ポストアパルトヘイト時代の南アフリカにおける黒人女性詩人の活動と彼女たちがおかれた状況を多角的に描き出す論集である。

『私たちの言葉、私たちの世界』というタイトルが示すように、言葉はどのような世界を作り出すのか、そして言葉を生み出し、広く送り届けるためにはどのような世界が必要なのか、詩人たちがそれぞれの経験と考えに基づいてこれらの問いに答えることが本書の中心的内容である。

本書の執筆者である黒人女性詩人たちは、アパルトヘイトという人種差別の歴史を色濃く残す南アフリカ社会で生きる経験を捉え、男性中心的な現状に対して異議申し立てを行う手段として詩を用いてきた。それらの詩は、個人の作品というだけではなく、バーやイベント、あるいはラジオでの朗読会で多くの聴衆を得るとともに、新たな詩人を掘り起こしてきた。編者である Makhosazana Xaba が第 1 章で詳細に跡付けているように、黒人女性詩人の作品はアパルトヘイト時代、そしてアパルトヘイト終焉後も出版社や主要なアンソロジーから排除され、周辺におかれがちであった。本書は黒人女性詩人が、白人の「目利き」に頼ることなく自身を含む南アフリカに生きる黒人女性の声を伝えていくために行った活動の記録として読むことができるだろう。

来日経験もある Gabebe Baderoon の序文は「詩に何ができるのか？」と問いかける。本書は、詩集出版の現状や詩が扱う対象の傾向に関する分析（第一部）、詩人としてのキャリアの回想（第二部）、そしてインタビュー（第三部）という豊富な内容で上記の問いに「世界を新しく作り替えることができる」と答える。多数の執筆者が自身の経験に基づき執筆し、内容も個人の回想から執筆言語の問題まで多岐に及ぶ。ともすれば散漫になりそうな本書ではあるが、全体をとおして一貫したテーマを感じる。それは、1990 年代以降の南アフリカにおける黒人女性による詩の興隆を支えてきた執筆者たちが、詩を書き続け、その詩を多くの人々に伝えるために世界を変えようとしてきた尽力を、本書が表すものになっているからだろう。2021 年南アフリカ人文学・社会科学賞（The Humanities and Social Sciences Awards）受賞も納得の、黒人女性詩人の歴史と今を描き出す力作である。

上林 朋広（かんばやし・ともひろ／日本学術振興会特別研究員 CPD・アジア経済研究所）

